

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：31308

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17279

研究課題名(和文) 幼児・児童期の情動表出の発達とそのメカニズムの解明：表情と言語の相補的機能の検討

研究課題名(英文) The Development of Emotional Expression in Preschool and Elementary School Children: The Complementary Relationship between Facial Expression and Verbal Expression

研究代表者

平川 久美子 (Kumiko, Hirakawa)

石巻専修大学・人間学部・助教

研究者番号：30711246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児期・児童期の情動表出における表情と言語との関係の発達的变化を明らかにすることを目的とした。3つの研究を通して、情動表出における表情と言語との相補的な関係は、幼児期から児童期にかけてより明確に理解されること、幼児期においては課題場面における情動表出に関する理解と日常場面における言葉による情動表出との間に部分的ではあるものの関連がみられることが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the relationship between facial emotional expressions and verbal emotional expressions in preschool and elementary school children. The findings of three experiments revealed: (1) the complementary relationship between facial expressions and verbal expressions was more cleared in elementary children than preschool children, (2) the understanding of emotional expressions in preschool children was partially associated with verbal emotional expressions in daily life.

研究分野：発達心理学

キーワード：情動表出 主張 怒り 表情 言語 幼児 児童

1. 研究開始当初の背景

私たちは人との関わりの中で様々な情動を経験し、表情や言語、声のトーンなどの情動表出を通してコミュニケーションを行っている。とりわけ怒りなどの否定的な情動の表出は他者との関係を悪化させる可能性があるため、抑制することが求められる。従来、自分の否定的な情動を隠してニュートラルな表情をするというような情動表出の抑制について多くの研究がなされ、幼児期後期頃から情動表出を抑制するようになることが示されてきた (e.g. Harris et al., 1986; 平川, 2008)。特に日本では、他者との調和を重んじる特有の価値観を背景として他者との関係を維持するために怒りを表出しないことが動機づけられやすく、怒りの表出を不適切なものとして忌避する傾向が強いと言われている (Lewis, 1993)。

しかしながら、他者との関係においては自分の情動を適切に表出することは、自分の情動や意図を他者に明確に伝えることで他者との関係を形成・維持するという点で非常に重要であると考えられる。とりわけ怒り表出は、一時的には他者との関係を悪化させる可能性があるが、今後も関係が持続することが予測される相手との間では、情動表出を通じたコミュニケーションによって根本的な問題解決を図ることが必要であると指摘されている (木野, 2003)。このように他者との関係を今だけでなくより長いスパンの中で考えると、よりよい関係を築いていくためには適切な情動表出がより一層重要になると考えられる。

近年、保育・教育現場における「気になる」子どもや発達障害をもつ子どもの中には、自分の情動や行動のコントロールが難しい、他者の気持ちを理解できない、自分の気持ちを適切に表現できないなど、情動面に問題を抱えている子どもが含まれている。このような情動面に問題を抱える子どもの理解と対応が、保育・教育現場における課題の1つになっている。このような点から、本研究では幼児期から児童期にかけての情動表出の発達の变化およびその発達のメカニズムの解明は必要不可欠である。

このような背景のもと、申請者は表情による怒り表出が幼児期から児童期にかけてどのように発達するのかを明らかにする研究に取り組んできた。その結果、年長児頃から怒りを抑制する動機 (e.g. 相手を悲しませたくない) をもっている場合には怒りを実際よりも弱めて表出すること (平川, 2008)、怒りを主張する動機 (e.g. 相手に加害行為をやめてほしいと伝えたい) をもっている場合には怒りを実際よりも強めて表出すること (平川, 2013, 2014) が明らかになってきた。また、小学1年生頃になると、怒りを表情のみで表出する場合と言語と表情で表出する場合とでは表情表出に差が見られるようになり、言語で表出する (言語的主張を行う) 場合には

表情表出を抑制するようになることも示されている (平川, 2013, 2014)。従来の情動表出に関する研究の多くは表情による表出のみを扱ったものであり、表情以外の情動表出モダリティとの相互的な関係の中で情動表出を捉えた研究はなされてこなかったと言える。

2. 研究の目的

(1) 私たちの情動表出は表情や言語、声のトーンなど様々な方法を組み合わせで行われ、過度に抑制したり過度に表出したりすることのないよう全体として適度な情動表出を行っていると考えられる。前述のように、従来の情動表出に関する研究では情動表出のモダリティ間の関係に着目した研究はなされてこなかったが、とりわけ言語的主張が顕著に発達する幼児期後期以降は言語表出が表情表出に非常に大きな影響を及ぼすと想定される。幼児期後期において言語による自己主張が顕著に発達する (e.g., 子安・鈴木, 2002; 鈴木, 2005) ことに伴い、言語で表出する場合には表情は抑制され、逆に言語で表出しない場合には表情で表出するというように表情と言語が相補的に機能するようになっていくと予想される。したがって、情動表出を表情と言語という2つのモダリティから捉え、幼児期・児童期の情動表出における表情と言語との関係の発達の变化を明らかにする。

(2) 情動表出がどのような要因の影響を受けて発達していくのかについては、平川 (2013) では他者の視点に立って他者の考えを理解できるかどうかという他者信念の理解が怒り表出の発達に及ぼす影響について検討を行い、他者の信念についてより理解している子どものほうが表情によって怒りをより強く表出することが示されている。しかしながら、年中児から年長児にかけて顕著に発達する他者信念の理解だけではそれ以降の情動表出の発達を説明することができなかった。そこで、本研究ではさらに情動表出の発達のメカニズムの解明を目指す。

3. 研究の方法

(1) 幼児期・児童期における情動表出における表情と言語との関係の発達の变化を明らかにするために、平川 (2013) の課題調査のデータの再分析を行った。平川 (2013) の課題調査では、主人公が友だちからの加害行為によって「少し怒っている」情動のときに、友だちに加害行為をやめてほしいと伝えたいという動機をもっているという仮想場面において、表情によって怒りをどのように表出するか、怒っていない顔、少し怒っている顔、怒っている顔から選択するよう求めた。この課題は、言語的主張をせず表情のみで怒りを表出する表情課題が1課題と、言語的主張と併せて表情表出を行う表情・言語

課題が1課題の計2課題から構成された(表1)。対象者は年中児60名(男児29名、女児31名;平均年齢5歳2か月)、年長児60名(男児29名、女児31名;平均年齢6歳1か月)、小学1年生60名(男児27名、女児33名;平均年齢7歳3か月)の計180名だった。

表1 表情課題および表情・言語課題のストーリー(女児用)

表情課題

今は静かに先生のお話を聞く時間です。あやちゃんもお話を聞いています。すると、隣の友だちがあやちゃんの服を引っ張りました。あやちゃんは少し怒っています。あやちゃんは「やめて」と言おうと思いましたが、静かにしないとみんなが困るので言いません。なので、あやちゃんは少し怒った顔をしました。でも、友だちはやめてくれません。それでは、あやちゃんはどんな顔をしたら服を引っ張らないでほしいと友だちに伝えられるかな。

表情・言語課題

あやちゃんはブランコの順番を待っています。そこへ友だちがやってきて、あやちゃんの前に横入りしました。あやちゃんは少し怒っています。あやちゃんは横入りしないでほしいと友だちに伝えたいとき、どんな顔で「横入りしないで」と言うかな。

(2) 大学生における情動表出との比較を通して、幼児期・児童期における情動表出の特徴をより明確にするために、質問紙調査を行った。質問紙は、平川(2013)で用いた表情課題1課題と表情・言語課題1課題の計2課題から構成された。質問紙には平川(2013)の課題の一連のお話が絵と文字で書かれており、対象者にはそれらを見ながら調査者が読み上げるお話を聞き、質問に回答するよう求めた。対象者は大学生51名(男性24名、女性27名、平均年齢19.7歳)だった。比較のために用いた幼児・児童のデータは年中児60名(男児29名、女児31名;平均年齢5歳2か月)、年長児60名(男児29名、女児31名;平均年齢6歳1か月)、小学1年生60名(男児27名、女児33名;平均年齢7歳3か月)、計180名だった。

(3) 幼児期における情動表出の理解と日常生活場面における情動表出との関連を検討するために、課題調査と質問紙調査を行った。課題調査では、子どもと調査者の個別場面において、絵カードを使ったお話を聞いてもらった後に、そのお話についての質問に選択式で回答するよう求めた。課題には、平川(2013)の表情課題1課題と表情・言語課題1課題の計2課題を用いた。質問紙には、本

郷ほか(2017)の情動発達の項目を用いた。表2に示した子どもの情動発達に関する7領域20項目について、担任の保育者に「全くない」(1)から「よくある」(5)の5段階で評価するよう求めた。対象者は年中児12名(男児10名、女児2名;平均年齢4歳7か月)、年長児11名(男児4名、女児7名;平均年齢5歳7か月)の計23名だった。

表2 情動発達の項目

表情	1. 喜んでいることを表情で表現する
	2. 怒っていることを表情で表現する
	3. 悲しんでいることを表情で表現する
言葉	4. 喜んでいることを言葉で表現する
	5. 怒っていることを言葉で表現する
	6. 悲しんでいることを言葉で表現する
抑制	7. うれしい気持ちを抑える
	8. 怒っている気持ちを抑える
	9. 悲しい気持ちを抑える
誇り・恥	10. 自分ができていることに誇りをもっている
	11. 自分ができないことを恥じている
理解	12. 友だちのうれしい気持ちがわかる
	13. 友だちの怒っている気持ちがわかる
	14. 友だちの悲しい気持ちがわかる
共感	15. 友だちのうれしい気持ちを自分のことのように感じる
	16. 友だちの怒っている気持ちを自分のことのように感じる
	17. 友だちの悲しい気持ちを自分のことのように感じる
過敏さ	18. ちょっとしたことでも怖がる
	19. ちょっとしたことでも嫌な顔をする
	20. ちょっとしたことでも驚く

4. 研究成果

(1) 表情課題の回答と表情・言語課題の回答の組み合わせについて分析を行った。表情課題のほうが怒りの程度が弱い表情を選択している場合は 表情<表情・言語、表情課題と表情・言語課題において同じ表情を選択している場合は 表情=表情・言語、表情課題のほうが怒りの程度が強い表情を選択している場合は 表情>表情・言語 とした。年齢群別の各組み合わせの人数を表3に示した。

これらについて²検定を行ったところ、人数の偏りが有意だった(²(4)=30.57, p<.01)。残差分析の結果、年中児では 表情=表情・言語 が多く 表情>表情・言語 が少なかったのに対して、小学1年生では 表情=表情・言語 が少なく 表情>表情・言語 が多かった。このことから、小学1年生になると、言語的主張をする場面よりも言語的主張をしない場面のほうが表情で怒りをより明確に表出すると理解していると考えられる。

表3 表情課題と表情・言語課題の回答の組み合わせ

年齢群	表情 < 表情・言語	表情 = 表情・言語	表情 > 表情・言語
年中児	11 (18.3)	42 (70.0)	7 (11.7)
年長児	8 (13.3)	37 (61.7)	15 (25.0)
小学1年生	7 (11.7)	19 (31.7)	34 (56.7)

注. 上段は度数、下段()内は割合。

(2) 課題調査における回答結果について、怒りをより強く表出すると回答したほうが得点が高くなるように得点化を行い、表情課題における得点を表情得点、表情・言語課題における得点を表情・言語得点とした(図1)。その上で、4(年齢群)×2(表出方法)の2要因の分散分析を行った。その結果、年齢群の主効果($F(3,227)=20.02, p<.001$)、表出方法の主効果($F(1,227)=22.36, p<.001$)、年齢群と表出方法の交互作用($F(3,227)=7.14, p<.001$)がそれぞれ有意であった。単純主効果検定の結果、以下のことが明らかになった。第一に、表情のみで怒りを表出する場面では、年中児・年長児よりも小学1年生・大学生のほうが怒りをより強く表出すると理解していた。第二に、表情と言語で怒りを表出する場面では、年中児・年長児・小学1年生よりも大学生のほうが怒りをより強く表出すると理解していた。第三に、小学1年生・大学生は、表情と言葉で怒りを表出する場面よりも表情のみで怒りを表出する場面のほうが、怒りをより強く表出すると理解していた。

これらの結果から、大学生は相手に加害行為をやめてほしいなどの主張的な動機をもっている場合には、より明確に怒りを表出すると理解していると考えられる。

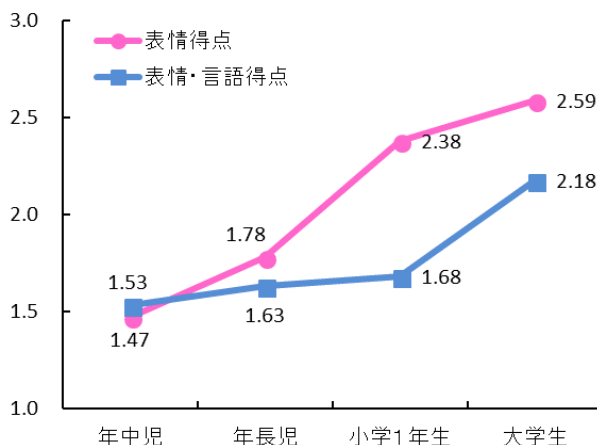


図1 表情得点と表情・言語得点の平均得点

(3) 質問紙調査の領域別得点について年齢群による差を検討するために、t検定を行った(表4)。その結果、誇り・恥・理解・共感の得点は年中児よりも年長児のほうが有意に高かった。このことから、誇りや恥などの二次的情動や情動理解、共感は年中児から年長児にかけて発達すると考えられる。

表4 各領域得点の平均得点

	年中児	年長児	t値
表情	4.56	4.36	.67
言語	4.06	4.06	-.02
抑制	2.00	2.57	-1.52
誇り・恥	2.96	3.68	-3.43**
理解	3.42	4.24	-2.40*
共感	2.06	3.48	-4.65**
過敏さ	2.97	3.27	-.99

注. * $p<.05$ 、** $p<.01$

次に、課題調査における回答と質問紙調査における回答との関連を検討するために、課題調査における回答の得点化を行った。怒りをより強く表出すると回答したほうが得点が高くなるように得点化を行い、表情課題における得点を表情得点、表情・言語課題における得点を表情・言語得点とした。

まず、表情得点および表情・言語得点と各領域得点との間の相関係数を求めたところ、有意な相関はみられなかった。次に、表情得点および表情・言語得点と各項目得点との間の相関係数を求めたところ、表情・言語得点と「5. 怒っていることを言葉で表現する」という項目との間においてのみ有意な負の相関がみられた($r=-.55, p<.01$)。このことから、表情・言語課題のように言語的な主張を行う場面において表情では怒りをあまり表現しないと理解している子どもは、日常場面では怒っていることを言葉で表現することが多いと考えられる。

以上の結果から、情動表出における表情と言語との相補的な関係は、幼児期から児童期にかけてより明確に理解されること、課題場面における情動表出に関する理解と日常場面における言葉による情動表出との間に部分的ではあるものの関連がみられることが示された。したがって、幼児期・児童期の情動表出を捉える際には、表情と言語という2つのモダリティから、その発達的变化を捉えることの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

平川久美子、幼児期・児童期における情動表出の発達：表情と言語の相補的關係に着目して、石巻専修大学研究紀要、査読無、第29号、2018、103-106.

平川久美子、幼児期・児童期の情動表出の発達に関する研究動向、石巻専修大学研究紀要、査読無、第28号、2017、79-84.

平川久美子、幼児・児童における情動表出の発達：怒りの主張的表出と相補性の理解との関連、家庭教育研究所紀要、査読有、36、2015、43-49.

〔学会発表〕(計2件)

平川久美子、大学生における怒りの主張的表出の理解—幼児・児童との比較を通して—、日本発達心理学会第28回大会、2017.

Kumiko Hirakawa, Noriko Iijima, & Chie Takahashi, Yoshiko Koizumi, Tetsuji Kamiya, & Kazuo Hongo, Differences in Emotional Development Between Typically Developing Children and Children with Special Care Needs, 17th European Conferences on Developmental Psychology, 2015.

〔図書〕(計1件)

平川久美子、北大路書房、社会性発達チェックリスト(改訂版)からみる子どもの発達、本郷一夫(編著)、「気になる」子どもの社会性発達の理解と支援：チェックリストを活用した保育の支援計画の立案、2018、pp37-56.

6. 研究組織

(1)研究代表者

平川 久美子 (HIRAKAWA, Kumiko)

石巻専修大学・人間学部人間教育学科・助教

研究者番号：30711246